

藤の実

寺田寅彦

青空文庫

昭和七年十二月十三日の夕方帰宅して、居間の机の前へすわると同時に、ぴしりという音がして何か座右の障子にぶつかつたものがある。子供がいたずらに小石でも投げたかと思つたが、そうではなくて、それは庭の藤ふじ柵だなの藤ふじ豆まめがはねてその実の一つが飛んで来たのであつた。宅うちのもの話によると、きようの午後一時過ぎから四時過ぎごろまでの間に頻ひん繁ばんにはじけ、それが庭の藤も台所の前のも両方申し合わせたように盛んにはじけたということであつた。台所のほうのは、一間けんぐらいを隔てた障子のガラスに衝突する音がなかなかはげしくて、今にもガラスが割れるかと思つたそうである。自分の帰宅早々経験したものは、その日の

爆発の最後のものであつたらしい。

この日に限つて、こうまで目立つてたくさんにいつせいにはじけたというのは、数日來の晴天でいいかげん乾燥していたのが、この日さらに特別な好晴で湿度の低下したために、多数の実がほぼ一樣な極限の乾燥度に達したためであらうと思われた。

それにしても、これほど猛烈な勢いで豆を飛ばせるというのは驚くべきことである。書齋の軒の藤棚から居室の障子までは最短距離にしても五間けんはある。それで、地上三メートルの高さから水平に発射されたとして十メートルの距離において地上一メートルの点で障子に衝突したとすれば、空気の抵抗を除外しても、少なくも毎秒十メートル以上の初速をもつて発射されたとしなければ

勘定が合わない。あの一見枯死しているような豆のさやの中に、それほどの大きな原動力が潜んでいようととはちよつと予想しないことであつた。この一夕の偶然の観察が動機となつてだんだんこの藤^{ふじまめ}豆のはじける機巧を研究してみると、実に驚くべき事実が続々と発見されるのである。しかしこれらの事実については他日適当な機会に適当な場所で報告したいと思う。

それはとにかく、このように植物界の現象にもやはり一種の「潮時」とでもいったようなもののあることはこれまでもたびたび気づいたことであつた。たとえば、春季に庭前の椿^{つばき}の花の落ちるのでも、ある夜のうちに風もないのにたくさん一時に落ちることもあれば、また、風があつてもちつとも落ちない晩もある。

この現象が統計的型式から見て、いわゆる地震群の生起とよく似たものであることは、すでに他の場所で報告したことがあった。

もう一つよく似た現象としては、いちよう銀杏の葉の落ち方が注意さ

れる。自分の関係しているある研究所の居室の室外にこの木の大きな木のごずえが見えるが、これが一樣に黄葉して、それに晴天の強い日光が降り注ぐと、室内までがこがねいろ黄金色に輝き渡るくらいである。秋が深くなると、その黄葉がいつのまにか落ちてごずえが次第にさびしくなっていくのであるが、しかしその「散り方」がどうであるかについては去年の秋まで別に注意もしないでいた。ところが去年のある日の午後なんの気なしにこの木のごずえをながめていたとき、ほとんど突然にあたかも一度に切って散らしたよ

うにたくさんの葉が落ち始めた。驚いて見ていると、それから十
余間けんを隔てた小さな銀杏いちようも同様に落葉を始めた、まるで申し合
わせたように濃密な黄金色の雪を降らせるのであった。不思議な
ことには、ほとんど風というほどの風もない、というのは落ちる
葉の流れがほとんど垂直に近く落下して樹枝の間をくぐりくぐり
脚下に落ちかかっていることで明白であった。なんだか少し物す
ごいような気持ちがあった。何かしら目に見えぬ怪物が木々を揺さ
ぶりでもしているか、あるいはどこかでスイッチを切つて電磁
石から鉄製の黄葉をいつせいに落下させたともいったような感
じがするのであった。ところがまた、ことしの十一月二十六日の
午後、京都大学のN博士と連れ立って上野うえのの清水堂きよみずどうの近くを歩

いていたら、堂のわきにあるあの大木の銀杏いちようが、突然にいつせいの落葉を始めて、約一分ぐらいの間、たくさんの葉をふり落とした後に再び静穏に復した。その時もほとんど風らしい風はなく、て落葉は少しばかり横になびくくらいであつた。N博士も始めてこの現象を見たと言つて、おもしろがりまた喜びもしたことであつた。

この現象の生物学的機巧についてはわれわれ物理学の学徒には想像もつかない。しかし葉という物質が枝という物質から脱落する際にはともかくも一種の物理学的の現象が発現している事も確実である。このことはわれわれにいろいろな問題を暗示し、またいろいろの実験的研究を示唆する。もしも植物学者と物理学者と

共同して研究することができたら案外おもしろいことにならないとも限らないと思うのである。

これとはまた全く縁もゆかりもない話ではあるが、先日宅うちの子供が階段から落ちてけがをした。それで、近所の医師のM博士に來てもらったら、ちょうど同じ日にM氏の子供が学校の帰りに道路でころんで鼻頭をすりむきおまけに鼻血を出したという事であった。それから二三日たってから、宅の他の子供がデパートでハンドバッグを掏すり摸りにすられた。そうして電車停留場の安全地帯に立っていたら、通りかかったトラツクの荷物を引つ掛けられて上着にかぎ裂きをこしらえた。その同じ日に宅の女中が電車の中へだいの包みを置き忘れて來たのである。これらは現在の科学の

立場から見ればまるで問題にもなにもならないことで、全く偶然といつてしまうよりほかはないことである。しかし、これが偶然であると言え、銀杏いちようの落葉もやはり偶然であり、藤豆ふじまめのはじけるのも偶然であるのかもしれない。またこれらが偶然でないとすれば、前記の人事も全くの偶然ではないかもしれないと思われる。少なくとも、宅うちに取り込み事のある場合に家内の人々の精神状態が平常といくらかちがうことは可能であろう。

年末から新年へかけて新聞紙でよく名士の訃音ふいんが頻繁ひんぱんに報ぜられることがある。インフルエンザの流行している時だと、それが簡単に説明されるような気のすることもある。しかしそう簡単に説明されない場合もある。

四五月ごろ全国の各所でほとんど同時に山火事が突発する事がある。一日のうちに九州から奥羽^{おうう}へかけて十数か所に山火事の起こる事は決して珍しくない。こういう場合は、たいてい顕著な不連続線が日本海から太平洋へ向かつて進行の途中に本州島弧を通過する場合であることは、統計的研究の結果から明らかになったことである。「日が悪い」という漠^{ぼく}然^{ぜん}とした「説明」が、この場合には立派に科学的の言葉で置き換えられるのである。

人間がけがをしたり、遺失物をしたり、病気が亢^{こう}進^{しん}したり、あるいは飛行機がおちたり汽車が衝突したりする「悪日」や「さりんぼう」も、現在の科学から見れば、単なる迷信であつても、未来のいつかの科学ではそれが立派に「説明」されることになら

ないとも限らない。少なくともそうはならないという証明も今のところなかなかむつかしいようである。

(昭和八年二月、鉄塔)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藤の実

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>